|  |
| --- |
| 〔講座解説〕　　　　　　　　「マルクス主義経済学講座」（上・新日本出版社） |
| 第1章　商品　第2節　商品に表示される労働の二重性　　　　　　　　　　 |
| 二面性の由来 | 商品の二面性（第1節－使用価値であると同時に価値である）は、実は商品に表示される労働の二重の性格に由来している。 |
| 労働の二重性の解明 | 「経済学の理解にとって決定的な跳躍点」（マルクス） |
| 結論の先どり | すべての労働は、一面では、特殊な、目的を規定された形態での人間の労働力の支出であって、この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を生産するのである。すべての労働は他面では、生理学的意味の人間の労働力の支出である。この同等な人間労働（または抽象的人間労働）という属性において、それは商品価値を形成するのである。 |
| ❶有用労働 | 例－上着と米は、質的に違う使用価値である。それらをつくる労働も裁縫労働、耕作労働のように質的に違う。有用労働とは、生産物の使用価値にその有用性が表示される労働のことである。 |
| 使用価値の生産 | 使用価値の生産は、目的、作業様式、対象、手段が異なる生産活動によって生み出される。すなわち有用性の質的な違いである。使用価値は自然条件と労働という二つの要素の結合物である。 |
| 社会的分業 | 独立した生産者がそれぞれ違う種類の有用労働を行い、商品を生産している。この総体的な関係が社会的分業である。これは商品生産の存在条件である。 |
| 有用労働の本質 | 有用労働は、人間の生活にとり、なくなくてはならない。社会形態にかかわらない人間の存在条件である。 |
| ❷抽象的人間労働 | 例－使用価値をつくる裁縫労働あるいは耕作労働から、有用性を抽象すれば労働に残るのは、それが人間労働力の支出ということだけである。これを抽象的人間労働という。 |
| 価値の実体 | 価値の実体は抽象的人間労働である。 |
| 現実社会の労働 | 　抽象的人間労働はけっして人間の観念のなかだけにあるのではなく、現実に社会の簡単な平均労働として存在する。 |
| 　　　複雑労働 | 特別の育成と訓練を受けて特別の熟練と技能をもった労働力の支出も存在する。 |
| 商品にふくまれている労働は | 1. 使用価値に関してはただ質的にのみ認められる。
2. 価値量に関しては、ただ量的にのみ認められる。
 |
| 使用価値量と価値量の相反する運動 | 生産力の変動は、価値として表示される労働それ自体には少しも影響しない。同じ労働は、同じ労働時間内には、生産力がどんなに変動しようとも、つねに同じ価値をつくりだす。素材的富である使用価値の総量が増加しても、その労働の生産力の拡大が、この増加した使用価値の総量の生産に必要な総労働時間を短縮させる場合には、その増加した使用価値の総量の価値量を減少させる。相反する運動は、労働の二面性から生じる。 |